

やってみよう

有明抄 「桜」

新聞の第一面にあるコラム記事です。「有明抄」を音読して、分からない言葉や漢字は辞書で調べて、表に書き出しましょう。また、この記事を読んだ感想や意見をあとに書きましょう。

あちこちで桜の花はほころび始めているのに、異常気象のせい、雨の日が続いた。開ききらずに散る桜の姿を想像して、心穏やかでなかった人も多いだろう。その無情の雨もやとおさまった。週末は天気も回復し、絶好の花見日和となりそうだ◆雨が上がった昨日、佐賀市の神野公園駐車場に車を止め、多布施川沿いを歩いた。公園内の桜はまだ三分咲きだったが、川辺の桜はもう満開に近かった。水との相性がいいのだろう。流れに吸い寄せられるように、川面に花を付けた枝を伸ばしている◆年老いた木もあった。こけむした幹の中は腐れて空洞になりながらも、精いっぱいみずみずしいピンクの花を咲かせている。このけなげさ、花の命の短さが、多くの日本人の心を動かしてきた。桜を歌った詩歌には名作が多い。いくつか胸にとどめて見れば、花の景色も変わってくる◆「世の中にたえて桜のなかりせば春の心はのどけからまし」。在原業平は、桜の花を胸の高鳴りを抑えきれない恋人のようにとらえている。近づいてみれば、色もはつきりしない白い花だが、人の心を波立たせるような不思議な魅力がある◆詩人の三好達治は「あはれ花びらながれ／をみなごに花びらながれ／をみなごしめやかに語りあゆみ／うららかなの聲音(あしおと) 空にながれ」とうたった。当時三好は東大の学生だった。青春の華やかさとはかなさが、流れる花びらと女の子たちの歩みから立ち上がってくる◆若い人たちは桜には格別の思い入れがあるようだ。森山直太郎の「さくら(独唱)」、「ケツメイシの「さくら」、コブクロの「桜」とどれも名曲だ。なぜこれほど桜は人の心を騒がすのか。花の盛りに花の下に立てば、答えが見つかるかもしれない。

調べた語句		意味・用法	

あなたの感想や意見を書きましよう。

注 佐賀新聞 平成二十二年三月二十六日付 一面
 在原業平…平安時代の歌人。六歌仙の一人。